＊＊＊紹　介＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

石渡　隆司　著

『医学哲学はなぜ必要なのか』

本書は『医学哲学はなぜ必要なのか』という極めて啓発的な題をもっている。しかし、総括的な医学哲学論、あるいは、医学哲学の必要性というテーマに絞って新たに書き下ろされたものではない。

本書は、一九八六年より十年近くにわたって日本医学哲学倫理学会の会長をつとめてこられた岩手医科大学石渡隆司教授の退官を機会に編まれた著作集であり、著者自身の言葉を借りれば、これまで「各種の雑誌や年報等に書いてきた〈医学と哲学の接点〉に関する小論のうち、現に市販されている書物や、専門の学会誌等に掲載されたものを除いた論稿のなかから、比較的一般読者の関心にも応えられそうなものを選んで一本に纏めたものである」。

著者の医学哲学論を評することなど浅学の紹介者にはできようはずもなく、書評と聞いてしばらく躊躇したのだが、本書自体、そうした対象としては編まれてはいないように思われる。医史学に関心のある方々、医療の現場に携わっていらっしゃる方々にも興味深い内容が盛り込まれている。したがって、ここでは『医史学雑誌』の読者に向けての内容の紹介を中心に、些かの読後感を加えていきたい。

本書は三部に分けて構成され、医学と哲学のさまざまな形での相互関連を読者に紹介し、「医学哲学とは何か。なぜ必要なのか」という問いかけを自らに、あるいは、医学概論、哲学、医療人間学を履修する医学生たちに向かって真摯に求め続けてこられた著者の歩みを部分的に概観できるような構成になっている。

著者によれば、「医学哲学とは、医学の理論や実践に見られる基本的構図の批判的吟味」である。今日において、科学哲学は科学史との密接な相互浸透と、アクチュアリティへの問いを無視しては成り立ちえないものになっている。医学哲学を扱う本書にも、同様の意識が窺われる。

まず、第一部「医学史から医学の哲学へ」には、著者が特に専門とされるギリシャ、ローマ時代の医学・医療に関する論稿が集められている。ここでは、常に、医療観、自然観といった哲学的側面との関連が問いかけられ、深みのある記述がおこなわれている。

「医学の哲学は可能か」と題された第二部には、現代医学の批判的吟味を濃厚に織り込んだ論稿が八本纏められている。「正常と病理の間」「医学の哲学は可能か」「慢性疾患と医療の限界」では、フーコー、カンギレム、ブールスの論を援用しつつ、「現代医学のパラダイム」批判が展開されている。「死のイメージの変遷に見る医学と哲学の接点と乖離」では、著者の言う「語られた死」、ないしは、「記録された死」

から見た死のイメージの変遷が、古代から現代を俯瞰する視角で語られている。しかし、「現代医学のパラダイム」あるいは「近代における死のイメージ」を規定したとされる一七―一九世紀に至る部分の医学史記述は、紙幅も狭く不十分なものに感じられ、物足りなさを覚えた。

「健全と不健全」では、ユベリーナスの「健全な精神は健全な身体に宿る」という語が、原典に基づき厳密な再吟味にかけられ、時とすると「評価者の帰属する体制に順応することだけが「健全」とみなされることにもなりかねない」、人格の全体の評価に関わりがちな「健全」という語の思想性に対する鋭い警鐘が鳴らされている。

「近代科学の揺籃期における医学の一側面」では、これまで、医化学者としての側面から研究されてきたヨハン・ヨアヒム・ベッヒャーの多面的な活動が紹介されていて、興味深く読ませていただいた。

第三部は、「医学哲学小論翻訳」として、いずれも重要な五つの論文の翻訳が採録されている。順不同で紹介したい。まず、ガレノスの「最良の医師は哲学者でもあることについて」。こなれた日本語で、こうした重要な著作を読むことができることを、改めて石渡氏と小林晶子氏に感謝したい。

他に、岩手医大で教鞭をとられた故パオロ・ベルナルディ教授の論稿が二本と、オランダ、イスラエルの若手医学倫理学者の小論が、それぞれ一本ずつ載せられている。残念なのは、こうした翻訳の元論文の書誌的データが載せられていないことだが、編集者に問い合わせてみたところ、いずれも講演原稿であり、これを直接、石渡教授が和訳されたとのことである。また、本書初版第一刷りには誤植が散見されるが、これも第二刷りでは、大幅に訂正されているとのことである。

ところで、著者は「あとがき」で、「私の問題意識の中心にあったものは、・・・パラダイム論に関わる問題であった」としている。パラダイムは、著者も書いておられるように、トマス・クーンが一九六二年に『科学革命の構造』で提起した概念だが、主として科学哲学者たちから、その概念規定の曖昧さを追及され、一九六九年にクーン自身が撤回を宣言したものである。その後、科学史家は、パラダイムという語を使用して論を展開することに非常に慎重な態度をとることが多くなっている。

本書に収められた論文は、いずれも短く、著者のパラダイム概念を正確に理解することは難しい。著者は、「他の理論体系との共存を受け入れない完結的な理論的枠組み（一五二頁）」を「パラダイム」という語で示しておられるのだろうか。それとも、クーンの最初の定義にしたがって、「心身の理解に関して精神と身体に二分化した（二四九頁）」デカルトの「業績」を「パラダイム」と表現されたのだろうか。

もし、前者であるとすれば、医学も共存不可能な理論体系どうしの「革命」的な転換によって展開してきたことになるが、紹介者には、医学の歴史は、より蓄積的要素の強いものに思われ、この主張に与することはできないように感じられ

た。

以上、不十分ながら紹介と、感想を述べさせていただいた。

（月澤美代子）

〔時空出版、東京都文京区小石川四―一八―三、電話〇三―三八一二―五三一三、二〇〇〇年三月二八日発行、菊判、二五二頁、定価三四〇〇円〕

小松　良夫　著

『結核――日本近代史の裏側』

我が国の結核患者の新発生数も罹患率（人口一〇万あたりの年間新発生患者数）も、最近減少速度が鈍化してきたとはいえ、ともかく減少し続けてきた。しかし、一九九七、九八、九九年の三年連続して増加に転じ、学校・病院・高齢者施設・事業所などで結核の集団感染・集団発生が頻発している。このような状況のもと、厚生省は一九九九年七月「結核非常事態宣言」を発表し、国民全般および関係諸団体に「結核の問題を再認識し、対策の推進に取り組むよう」要請した。このように「結核の再興」が論議されているとき、小松良夫氏によって『結核――日本近代史の裏側』が出版された。時宜を得た出版であり、広く読まれることを期待したい。

副題の『日本近代史の裏側』にこめられた小松氏の意企あるいは心情は、小松氏の自序によって明確に知ることができる。「明治新政府が樹立されたのは一八六八年で、一三〇年あまりが経っている。この間、二つの大きな出来事があった。一つは『戦争』で、一つは『結核』である」と言い切る小松氏の言葉は鮮烈である。これまでにも「結核は社会病である」とか「結核は資本主義を象徴する病気である」などの表現は、半ば決まり文句のように多くの人によって使われてきたが、明治以降一三〇年の日本近代史を「戦争」と「結核」という二つのキーワードで裁断したのは小松氏をもって嚆矢とするであろう。この小松氏の史観は、殆ど独力で収集された学術書から啓蒙用パンフレット・患者の病床記にいたる豊富な資料によって裏づけられており、他方、「若い人々が逝くなり、傷つき、人生を大きく変えてしまう」原因となった「戦争」と「結核」に対する激しい怒りに支えられていると思われる。「戦争」と「結核」によって生命を奪われた若者たちへの哀惜の念は、御次男を失われた小松氏の鎮魂の情と結びついて、この著書に結晶したと拝察できる。

経済的先進諸国のうちで、第一次または第二次世界大戦後減少し続けてきた結核が再び増加し始め、「結核の再興」を経験したのは日本が最初ではない。アメリカ合衆国でも一九八五年から結核罹患率の逆転・再上昇がみられた。アメリカの場合、責任行政組織であるCDCが「結核再興の最大の原因は、結核問題の軽視からくる予算の削減とそれに伴う公衆衛生下部組織の崩壊である」と率直な自己批判を行い、結核